



第十四回

先輩の力を
上手に借りるには

文 | toshi
イラスト | 秋野 純子

○指導を受けるのが
苦手な新米先生

今、一部の新米先生は、先輩に聞いた
り、助言・指導されたことを受け入れた
りすることが上手ではないようです。私
も初任者指導に携わって十年ほどたちま
すが、そうした傾向は感じています。ど
うしてなのでしょう。二つの事例を挙げ
てみたいと思います。

一つ目は、指導があっても、自分の思
い、こだわりにとらわれている事例です。
こんなことがありました。四月当初、学
級はいい雰囲気だったのですが、五月後
半くらいから落ち着きがなくなり、授業
中騒いだり、席を立ち歩いたり、友達を
突っついたりして秩序を乱す子が出始め
ました。同時に、かなりの子が先生の話を
聞かなくなり、近くの子と勝手な話を
するようになってしまいました。私は、

一週間に一日初任者の教室に入るのです
が、ある日はたと気づいたことがありま
した。そこで、新米先生に言いました。
「先生は叱ることはよくやっているけ
れど、子どもをほめることはほとんどし
ていないよね。私はこれまで、こんな時
はぜひほめてやりなさいと言ってきたけ
れど、どうして子どもをほめないのかな」
すると、こんな答えが返ってきました。
「はい。先生は『Aさんが一時間席に
着いていたとき、Aさんをほめなさい』
とおっしゃいましたが、もう四年生なの
だから、そんなことくらいでほめること
はないと思いました」

今、一部の子どもには幼児化が目立ち
ます。ひと言で言って愛情不足。それによ
って情緒不安定な子が増えています。
そんなとき、教師まで杓子定規の対応で
は、子どもはますます不安定になってし
まうでしょう。「もう〇年生なのだから」
と考えるのではなく、その子の実態に即
した言葉かけが望まれます。

しかし、ここで言いたいのはそのこと
ではありません。私の話に違和感を覚え
たのなら、その場ですぐ「私はこう思う
のですが」と言ってほしかったのです。
その場では何も言わず、わかったかのよ
うな態度だったのに、実践の場でそれを
しないとというのは、新米先生自身も苦
しくなりますし、子どもがかわいそうです。
この新米先生は、学級の秩序が乱れが

子どもと動き回れる。子どもと感覚がびったり合う。

それは子どもたちにとって最大の魅力。

「さあ！その若さという武器を最大限発揮しよう」

toshi 先生から新米先生へのエールです。

< toshi 先生プロフィール >

子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切に、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のブログ」を執筆中。

ちになるのを感じていたので、その後、よく子どもをほめるようになり、そして一人ひとりの子どもの実態に即した言葉かけができるようになりました。その結果、だんだん学級は落ち着きを取り戻していきました。

○自分で自分を変える努力も時には必要

次は、先輩教員の指導を仰ぐのを苦手とする新米先生の事例です。この先生は、「自分の力不足はわかっている。しかしそれを言われるのがつらい。こわい」そう思っているようです。これは自分の感情にとらわれているといつていいでしょう。ですから、自分から先輩に聞くことはほとんどありません。先輩の指導から逃げたい思いが強いです。

また、指導を仰ぐのが苦手ではなくても、大陸的で悠然としたタイプ、自信家タイプにも同じような傾向が見られます。これらは全て問題となるわけではありません。スタートから子どもとの接し方が上手で、子ども先生を慕っている事例は少なからずあるからです。

しかし、もし学級経営に問題を感じるようなら、自分で自分を変えていく努力をしなければなりません。先輩からの指導を受けることが苦手であっても、学級が落ち着かなくなつて一番困るのは、他

でもない自分自身なのです。自分を変えることによって学級が落ち着いてくれば、自分が一番充実した思いになります。私も若いとき、こうしたことがあります。どうしても苦手な子ができてしまうのです。でも四・五年たつと、その子のあるがままを受け止め、叱責でなく受容、励ましの心で接することができるようになりました。

あるとき、「ああ。かつての自分なら、この子は反抗的な態度になってしまっただろうな」と思うことがありました。そのときは涙が出るほどうれしかったものです。

こうした自己改革は子どもにとっても幸せなことでしょう。自己改革はつらく困難なことも多いものです。しかし、この仕事を選んだのは自分ですし、一生の仕事とするなら、その努力の有無は、教員としての人生を決定すると言っても過言ではありません。

一方、うまくいっている場合はどうでしょう。これも努力は必要です。学級経営に「これでいい」ということはないのですから、より豊かな学級経営、児童理解を目指して努力する必要があります。



○「新米」先生をうまくもり立てていく

最後に、初任者指導に携わる教員はもちろん、日々新米先生のまわりにおいて、指導する立場の先生方にも申し上げたいことがあります。

前号でもふれたのですが、今は昔と違い、若い先生方を手とり足とり指導する必要がありません。また、たとえ困っているように見えなくても、新米先生が良しとしてやっていることが大変問題となるケースも増えています。例えばこんなことがありました。子どもが「ごめんなさい」とあやまるまで追及しようとするため、子どもは泣きながらもますます意固地になってしまいました。そうしたことが積み重なった結果その子は反抗的になり、それに同調する子も現れ、事態を深刻化させてしまいました。

このような場合、新米先生は初め問題性に気づいていないのですから、先輩教員のほうから声をかけてやる必要があります。

新米先生が質問・相談したくなる雰囲気づくりも大切でしょう。七つほめて、三つ課題を指摘するといった指導がいいのではないのでしょうか。そのようにして最終的には学校全体の盛り上がりを作りたいものです。